

---

◎議案第 5号 平成24年度白老町港湾機能施設整備事業特別  
会計補正予算(第2号)

○議長(山本浩平君) 日程第11、議案第5号 平成24年度白老町港湾機能施設整備事業特別会計補正予算(第2号)を議題に供します。

提案の説明を求めます。

高島都市整備部長。

○都市整備部長(高島 章君) 議5-1でございます。議案第5号 平成24年度白老町港湾機能施設整備事業特別会計補正予算(第2号)。

平成24年度白老町の港湾機能施設整備事業特別会計補正予算(第2号)は、次に定めるところによる。

(歳入歳出予算の補正)

第1条 既定の歳入歳出予算の総額から歳入歳出それぞれ528万1,000円を減額し、歳入歳出予算の総額を歳入歳出それぞれ1億4,560万6,000円とする。

2 歳入歳出予算の補正の款項の区分及び当該区分ごとの金額並びに補正後の歳入歳出予算の金額は、「第1表 歳入歳出予算補正」による。

(地方債の補正)

第2条 既定の地方債の変更は、「第2表 地方債補正」による。

平成25年2月27日提出。白老町長。

以上でございます。

○議長(山本浩平君) 提案の説明が終わりました。

これより本案に対する質疑を許します。質疑のございます方はどうぞ。

3番、斎藤征信議員。

○3番(斎藤征信君) 斎藤でございます。9ページ、この490万円の減なのですが、上屋使用料を3割カットしたということでの不足分をこの会計から出すという形になっているわけですが、これは平成13年、本体が約7億1,000万円かかった、経費を入れて9億7,000万円というふうに思っているのですが、それを20年償還で45年かかって、その利用料でちょうどペイするという形でこの計画でいったのです。あの上屋を建てたときに10%のオープンスペースをつくっておいて、あとは製紙会社に使ってもらおうと。もしその10%のほかの企業の利用がない場合には、全部それは製紙会社で持つという約束でやった。それがこの45年間でちょうどペイするという形になっていたはずなのです。そういう約束の中で始まったものが、何で3割減になったのかということがどう考えてもわからない。その分を公共上屋ですから足りなければ、必ず町が負担しなければならないということは当然のことになる。それが今度はどんどん縮小していくと、町の持ち出しがどんどん多くなるという計算になってしまいます。そういう形でこれが、あれから何年たつのですか、13年ですから、まだ12年ぐらしかたっていないです。これから先の長い話なのに、今もうこの12年の間にもう不足分を生じているという

のは、そのときの契約がどうだったのかということに疑問を持ってしまうわけです。契約があったのか、なかったのか。どうなっていたのか。そのあたり説明をしてもらわないとこの減額というのは納得いかないというふうに思うのですがいかがでしょうか。

○議長（山本浩平君） 赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君） お答えします。まず、約束があったのかということなのですが、齋藤議員がおっしゃったのは、それは上屋の料金を決める際の計算方法でありまして、専用で90%見て、一般で10%を見て、それで、上屋の520.8円というのを出した計算上の話です。あくまで公共の上屋ですので、契約というものはございません。毎年、半年ごとの契約となっております。

以上です。

○議長（山本浩平君） 3番、齋藤征信議員。

○3番（齋藤征信君） その当時の契約があったか、なかったかということは、中身については詳しいことはよく理解していませんけれども、その説明されるとおりだとしても、あの時点で100%企業が持ちますという話はずっとあったはずです。だけど、それがなぜ、今の段階で3割減という話が出てきているのか。その理由というのがあるはずだと思うし、100%見ますと言ったのが、それでは、それは約束でも何でもなかったという、我々は完全にそういうふうに聞いているのです。ほかの議員さんもそうではないかと思うのですけれども、100%企業のほうで持ちますから大丈夫ですという話は何回もあったはずです。それなのに今になって、いや、これはそういう半年の契約で、企業が景気悪くなって使わなくなったら、いつでも町が持ち出さなければならないのだというそういう論理というのは今だかつて聞いたことはなかった。それがどうして今になってそういうふうになるのか、それが理解できない。そういうことです。

○議長（山本浩平君） 高島都市整備部長。

○都市整備部長（高島 章君） ご存じのとおり、上屋は非常に建設費がかかったものでございます。ですから、当然、ああいうものを建てる時は建てた後の、借金で建てますから元利償還金が生じます。そういったものはどうやって返すのかと、そういう見通しのもと建てるといことで、その時やはり議会の同意、それから、町民の皆さん方の同意を得るためには、理解を得るためにはそれ相当の使うという確率、予想、それが絶対必要なはずだったと思うのです、当時は。それで、そのときの根拠としては、当時の町内の業者、そこが大口の業者が使っただけ、だから、将来にわたって大丈夫ですと。そして、なおかつ公共だから10%くらいはほかの人が使うことも見込まれますといことで、そういった中で試算して建設をしたところでございます。そういった部分では、約束という部分、これはもう本当に暗黙の了解と申しますか、そこを町が信じて見通しを立てて、そして、建設をした。ですから、その部分、齋藤議員が今おっしゃりたい部分は、多分その見通しの甘さ、その部分だと思うのです。その部分については、やはり相手が民間企業というのもございます。ですから、その企業がしっかりと収益を上げる中では、生産したもの、そういったものを運搬するコストだとか、そういったものを加味した中でその流通の形態が変わると、時間において変わると、そういっ

たことを加味するとそういうこともあり得ると。そういった中で今回 30%も減してしまったということでございます。そういった部分については、当然、公共上屋ですから、町としてはその企業に対してはもう少し使ってくださいよとか、あるいは、ほかの企業にも、町内企業あるいは企業誘致の一つのアイテムとして多方面にわたって多角的に使用率を上げるためのPR、これは絶対しなくてははいけないと思います。そうでなければ、今、斎藤議員のご指摘のとおり、見通しの部分についてはやはり町の責任ですから、そこはもうしっかりとやっていかななくてははいけないと。今そういうところに町の立場が置かれているということでご理解いただきたいと思います。

以上です。

○議長（山本浩平君） 3番、斎藤征信議員。

○3番（斎藤征信君） 公共上屋というのは企業が相手ですから、企業の浮き沈み、業績の好況なとき、不振なとき、いろいろあって、そういう波があるということはよく理解できるので。ただ、今まで、ついこの前までそこは使っていた。今も使っている。それが100%かどうかはわからないけれども、ほぼ100%に近い形で使っていると私はずっと聞いていたような気がするのです。それがなぜ、今、3割方空いているということになるのかどうなのか。3割方空いたから、これは満度にもらっているけれども、これはどうしてもこの部分は町の負担になるという話ならわかるけれども、3割方空いているとは聞いていないのです。だから、その分、企業が責任を持たなくてもいいという論理だったら、それはそれとしてしようがないのかもしれないけれども。そう言われてしまうと、検討するときだまされたかなという感じがどうしても起きてしまうのです。そんな中で今の倉庫の現状というのは、本当に3割方空いたから3割減になったのかどうなのか。そのあたりどういうことになるのですか。

○議長（山本浩平君） 高島都市整備部長。

○都市整備部長（高島章君） 企業と契約するとき、先ほどうちの室長が言ったように半年契約なのです。半年にこれだけの面積を使いますという契約をします。そのとき、その契約の部分が100%に使われようが、使われまいだろうが、それは契約があるから、それは満額いただきます。ただ、今回の場合は、その半年ごとの次の契約の中で、もうそこは使いませんといった部分で30%減になったという形でございますのでご理解いただきたいと思います。

○議長（山本浩平君） 8番、広地紀彰議員。

○8番（広地紀彰君） 今の件にもかかわってなのですけれども、1点だけです。上屋の使用料の件だったのですが、今までの経緯については理解しました。ただ、今後、第3商港区の暫定供用も始まる中で、今、この公共上屋の使用料が減っているのはやっぱり紙の移出の取扱高が最盛期と比べたら相当数落ち込んでいるという実態によるものだというふうに理解していて、それは確かに会社ですから、それが苫小牧港のほうで移出されているという実態もあるようですけれども、今後、第3商港区の暫定供用に当たって、例えばRORO船だとか、もっと横積みしなくてもよくなる、そういった形でのポートセールスとの関係で、この上屋の使用というのが、また以前のようにある程度もっと活性化していけるという見通しや進捗、協議やポ

ートセールス、そのあたりというのは見えるものなのでしょうか。

○議長（山本浩平君） 赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君） 現実にはポートセールスはしております。ただ、それがまだ利用に至っていないというのが現実でございます。それと、RORO船ですが、RORO船もうちのほうでポートセールスして、何とか入れてほしいと要請しております。

○議長（山本浩平君） 8番、広地紀彰議員。

○8番（広地紀彰君） これで終わりにします。現状はわかっているというか、おっしゃるとおりだなと思ってはいます。ただ、やっぱり今回、第3商港区でほかにチップだとかその後もっと大きな問題も抱える中で、ただ目の前にある、単純になぜ苫小牧のほうから移出していくかという問題については、私が聞いている範囲では、やっぱり白老からの荷役では横積みしなければいけないと。だけど、あちらの苫小牧港に至ってはフェリーに一発でトレーラーごと入れられると。そういった部分でかなりコスト面下がるのだと。ただ、当然、苫小牧港までの輸送料だとかそういったことも全部加味されます。白老港でもしそれができるとすれば、当然そちらが安くなるという考え、単純な考えですけどそうなります。なので、やはりこれは一刻も早く進めるべきだというふうに。これは共通理解している部分だとは思いますが、強く考えていますがいかがですか。

○議長（山本浩平君） 高島都市整備部長。

○都市整備部長（高島 章君） 今紙の需要が非常に落ち込んで、生産量自体が非常に落ち込んでいる。そして、なおかつ単価が落ちているといったことで、量的な部分、それから、単価が落ちているという、そこでよりコスト削減、ここの部分がシビアになってきている。そういった現状で白老港から製品の移出が今とまっているという状態でございます。RORO船の場合、うちがRORO船を誘致する。このことも大事なことだと思うのです。うちからわざわざ苫小牧港まで走って行ってシャシーで積み込んでというより、うちのところから積んでもらったほうがずっと楽です。一方では、RORO船を活発に入れると今度は上屋が必要なくなってくるといふ、そういうようなことも出てきます。そういったことを加味しながら、荷物を扱う荷主さん、それから、船会社、仲介の人たち、こういう人たちの情報をしっかりつかまえてセールスをすることによってどういうものを上屋で活用させられるか。あるいは、RORO船で持って行かれているものをどうやってここで来てもらうか。やっぱり船がここに着いてもらわなくてはいけないですから、そこでは荷主さんと船会社両方でのセールスだとかそういった部分がございます。ですから、これからはそういった企業誘致と連動したポートセールス、それが重要になってくるということで、今回、機構改革でも産業経済課のほうに移したといった根拠はそういうところにあるわけです。ですから、そういった見通しについては、皆さん方に本当にいい報告ができるような見通しを立てるために、今現在、組織も含めた中で役場一丸となってポートセールスしていかななくてはならないというふうに考えているということでご理解いただきたいと思います。

○議長（山本浩平君） 4番、大淵紀夫議員。

○4番（大淵紀夫君） 4番、大淵です。同じことを言おうとは思いませんけれども、記憶で言えば間違いなく100%45年間払うというふうに町側は議会側に答弁しています。私もこれ何度か質問しています。必ずこういう事態がくるだろうと。30%減というのはくる。そのとき町は、そういうことはありませんと最後まで必ずいきますと、これは予算委員会なり、代表、一般質問の中に必ずあります。私、それは鮮明に覚えています。私が質問したものもあるし、同僚議員が質問したものもございます。こういうことというのは、起こってくると、そのとき議決が必要なためにそういう方便を使うというふうにしか考えられなくなってしまうのです。確かに部長の答弁はわかります。だけど、そのときと会社が変わっているだとか、行政の人たちも皆変わっていると、だけど議決したときは、明らかに45年間町は一銭も出さなくてもいいですと言っているのです、町は。これは、古い町の職員の皆さんは知っていると思います。これは議会で答弁していますから。それで、10%はどうなるのかと言ったら、それもちろん、使っても使わなくても見ますと答弁しているのです。それが今の段階でこうなったと。契約は結んでいないし何もないから仕方がないのだというふうになったら、本当にそれは議会を通すための方便だったのかというふうにはかならないのです。そうするとこれから行う企業誘致含めてみんなそうになってしまうと思うのです。例えば、今回の30%というのは、日本製紙がそういうふうに使われたときに、町側はご無理ごもつともですというふうに言ったのですか。それとも、こういう経過がございますというふうに言ったのか。また、契約の変更をしたときの経緯というのは、中身というのはどういう中身ですか。やりとりです。

○議長（山本浩平君） 高島都市整備部長。

○都市整備部長（高島 章君） 大淵議員おっしゃる部分、そこは本当に私、席、反対側に座っていても、この部分は本当に何とも言い難い部分だと感じております。それで、ご質問の件ですが、それは実は100%でずっと契約しておりました。そして、その中で実際使っていないくても100%ここ数年実は払っていただいているのです。そういった中でもう限界だというようなそういったやりとりの中で、町は、そうは言わないで使ってくださいということで再三再四お願いして、ずっと実は使っていただいた経過がございます。そういった中で本当に残念なのですけれども、それでは、契約面積減らしましょうという経過がございます。ですから、単に今、突然言われて、はい、わかりましたとそういうような経過の中で町が簡単に認めて引き下がったということではないということをご理解いただきたいと思います。

○議長（山本浩平君） 4番、大淵紀夫議員。

○4番（大淵紀夫君） 4番、大淵です。この上屋が建つときに、記憶では13年なのだけど、14年にRORO船はもうそのときに苫小牧に入っていたのです。そういう議論もしているのです、議会で。RORO船が入って大丈夫なのかと言ったら、大丈夫だと。これはずっと未来永劫、45年間大昭和が払うから大丈夫だと答弁しているのです。きょう議事録持ってきていませんけれども。それは間違いなく答弁しています。それで、こうなったら、これで600万円の町民の血税がそこへ出ていくのです。RORO船の議論もしていたのです。そうしたら、それでは一体、議会のチェック機能は何なのだとはいえないですか。企業が困るから町の税金で見るの

だと。我々の金ではないと言っても、我々も払った、町民もみんな払った税金です。しかし、こういうことがいろいろな形で出てくるとしたら、本当に議会の役割とか自治体の役割って何なのかというところまでいってしまうのです。だから、この場合は議会も承認していますから。だけど、100%払うと言ってくれたことに対して賛成しているのです。これを本当にどう考えるべきか。声荒げても仕方がない話なのだけど、認められないと言っても相手は払わないと言うのでしょうか。裁判もやりようがないのです、契約書ないのだから。これは一体誰がどこでどういうふうに責任を負うというふうになるのかと質問してもだめだけど、本当に納得できないのです。賛成できないのです、僕は。どう考えるべきかというふうに言ったら、考えようがないのです。そのことを質問しても仕方がないかもしれないけど、だけど、町は間違いなくそうやって言って、これを建てたのです。そこはどうなのですか。

○議長（山本浩平君） 高島都市整備部長。

○都市整備部長（高島 章君） 大淵議員のおっしゃるとおりで、私も過去の議事録と書類等を見ております。当時の議論も、まだ私、課長職ではございませんでしたけれども、かなり大きな議論を呼んで上屋を建てたという記憶がございます。この中の議員さんで、あの議員さん、この議員さんがこう言ったという部分、そこははっきり覚えてございます。ですから、そういった中でこういう事態が生じたということ、これは本当に行政としては、相手が言ったから、はい、わかりましたで済まされるようなことではない、このような認識を抱いております。ですから、ここは本当に町長の考え方で組織を改編して、そして、役場が丸となって上屋の使用、そして、第3商港区の使用、それを何とか100%に近い使用になるようにやっていかなくてはいけない、そういう気持ちでいるということで、そして、その成果も早めに出さなくてはいけないと思っておりますので、そこは本当に大淵議員のおっしゃる部分、これからいろいろなプロジェクトがあると思うのです。でも、そこもあくまで想定、いろいろな条件を設定した中でこれに投資しましょう、どうですかと議会に提案するわけです。そういった部分にも大きく影響する問題だと思っておりますので、ここは本当に1日でも早いポートセールスや企業誘致を展開して成果を出さなくてはいけない部分だと思っておりますので、一つご理解いただきたいと思います。

○議長（山本浩平君） ほか質疑ございませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○議長（山本浩平君） 質疑なしと認めます。

これをもって質疑を終結いたします。

これより討論に入ります。討論はありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○議長（山本浩平君） 討論なしと認めます。

これをもって討論を終結いたします。

採決いたします。

議案第5号 平成24年度白老町港湾機能施設整備事業特別会計補正予算（第2号）、原案の

とおりに決定することに賛成の方は挙手を願います。

[挙手多数]

○議長（山本浩平君） 賛成 10、反対 2、3 番、斎藤征信議員、4 番、大淵紀夫議員。  
よって、議案第 5 号は、原案のとおり可決されました。